様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　　5 月　　20 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2009
課題番号：１８５２０３０７
研究課題名（和文）旧ユーゴスラヴィアのメディア、言語、アイデンティティー

研究課題名（英文）Media, Languages and Identity in Former Yugoslavia

研究代表者
三谷　惠子（MITANI KEIKO）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号：１０２２９７２６

研究成果の概要（和文）：本課題研究では、旧ユーゴ諸国、とりわけユーゴ戦争当事国であったクロアチア、セルビア、ボスニアにおけるメディア状況とそこに現れる言説を研究対象とした。そして、人々のアイデンティティーのあり方がどのように言語化され、また言語化されたものによって集団のイメージがどう形成されるかを、現地で発行されている新聞・雑誌に用いられる特定の語の分布分析や語連想による語の意味分析によって明らかにし、こうした言語分析の手法が社会心理学的問題を考察するためにも有効な方法であることを示した。

研究成果の概要（英文）：This grand-in-aid study focused on the media situation and media discourses in former Yugoslav countries, especially in Bosnia, Croatia and Serbia. Special attention was paid to the interrelationship between collective indentity, verbal behaviour and media disourse. Extensive examination of particular words and their distribution in media texts, and semantic analysis using words association were proved to be effective in not only linguistic but also sociophycological researches.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	700,000	0	700,000
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	2500,000	540,000	3040,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：バルカン、旧ユーゴスラヴィア、メディア、セルビア、クロアチア、ボスニア

１．研究開始当初の背景

研究開始当初は、ユーゴスラヴィアが崩壊し新たな国家が形成されて 10 年以上が経過した時期であり、旧ユーゴ地域ではスロヴェニアを除く諸国において、欧州連合加盟をめざした民主化や旧連邦構成国同士の関係正

常化の試みが模索されていた。そうした中で当然のことながら、その地域に住む人々の意識、自己イメージ、他者とりわけ旧ユーゴ地域の他の民族に対する認識などにも変化が生じはじめていた。また、ユーゴ戦争当時は政治プロパガンダに利用される傾向のあったメディアにおいても報道体制の民主化、自由化の傾向が顕著に見られた。しかし同時にメディアの商業化、多元化といった新たな時代の到来もあり、またボスニアの一部のメディアがイスラム色を濃厚にするなど、メディア環境にもかつてなかったような状況が生じた。ここから、変容するメディアの実態、そこに現われる言説のあり方、そしてメディアの受け手となり、また同時にメッセージを発信する担い手でもある現地の人々の言語行動を観察し言語研究の立場から分析することが必要であると考えられた。研究のパラダイムにおいても、メディアの多様化とともにメディア研究のあり方も多様をきわめ、また談話分析においても批判的談話分析の手法がさまざまな領域に用いられるなどの動きがあった。こうした研究のパラダイムの適応、検証、妥当性などを事例にあてはめながら実施することも必要であると考えられた。

２．研究の目的

上記のような背景をふまえ、一般論に還元しうる課題としては、大きな社会変動の中にあって言語がどのように機能し、言語コードの実態がどう変化するか、また言語を用いて形成される集団意識とはどのようなものか、逆に集団意識によって作られる言語特徴とはどのようなものかといった問題を設定した。また同時に、これらの問題がどのような研究の方法論によって適切に評価されうるのか、新たな問題の切り口の可能性はないのか、といった研究方法上の問題を設定した。

本課題研究ではこうした問題を、旧ユーゴスラヴィア圏の状況に適応させ、戦争当事国であったセルビア、ボスニア、クロアチアにおけるメディアテクストの具体的な事例に基づいて考察することを目的とした。また、この地域の特性を理解するためにも、民族意識の形成にメディアがどのように関わって来たかを過去にさかのぼって考察する必要があると考え、19 世紀のユーゴスラヴィア国家形成期におけるメディア状況も分析の対象とした。

上記の目的を設定することによって、この研究に、言語コードそのもの、その変化や運用実態に関わる言語学の研究としての性格を与え、同時に言語と社会の関わりを考察する社会言語学の研究としての位置づけも与え、言語とその使用者集団、使用される社会の関係を動態的にとらえようと考えた。

３．研究の方法

（１）メディアの言語実態から、それを発信し、また受信する主体である言語集団の意識を探った。具体的には、セルビア、ボスニア、クロアチアで刊行されている主力定期刊行物の記事を１年分程度集めて分析対象とし、その中で特定の語彙がどのように用いられているか、具体的にはその頻度・使用文脈・語が使用される統語環境などを調査した。さらにこれを言説全体のテーマ、特定のジャーナリストの文面、社会の文化的背景などに多角的に照合させながら分析し、集団におけるアイデンティティ形成についての考察を行った。

（２）特定の語がある別の語句と結びついて想起される語連想（word association)の作用に注目した。語連想とは、言語の話者がある語から思い浮かべる語句のことであり、語の意味のネットワークや語句の慣用的用法などを示すものである。またそうした連想が生じる背後には、そのような語の運用を引き起こす社会的・文化的条件があると想定される。そこで旧ユーゴ圏における語連想のパターンを調べ、これをメディア言語における同種の表現の出現、分布、また部分的にメディア映像、知識人の発言などと合わせて考察し、自己イメージ、他者イメージといった抽象的な問題を、具体的な言語資料の分析からアプローチすることを試みた。

（３）メディアとその言語が民族意識の形成にどのような役割を果たしたかを考察するために、19 世紀中期にダルマチア（現在のクロアチア）で刊行された地方誌『ダルマチアの夜明け(Zora Dalmatinska)』の言語分析とその時代の言語状況、そこに述べられていることがらを分析した。また同誌の中核的存在であったクズマニッチ(Ante Kuzmanić)を 19 世紀におけるメディア人としてとらえ、民族意識の形成過程を分析するための材料とした。

４．研究成果

（１）上記３.の（１）については、特定のキーワード、たとえば Balkan（バルカン)、Europa(ヨーロッパ）などを設定しその分布を綿密に調べることで、セルビア、ボスニア、クロアチアにおけるこれらの語の用法の違い、さらにはその背後にあるそれぞれの国の人々の自己イメージの違いを明らかにすることができた。また統語上の分布（主語になるか補語になるかなど）に注目し、その異なりから当該の語の指示対象に対する表象と

それらが生じる社会背景、当該地域の地政学的および文化的環境の関係を明らかにすることができた。この研究は北海道大学スラブ研究センター主催の国際シンポジウムで発表し、また同センター刊行の『講座スラブ・ユーラシア学』の一章としてまとめ、言語研究と地域研究をつなぐものとしての評価を得た。この研究は、統語分析や意味分析の方法をさまざまなタイプのテクストや談話に適応させ、言説の中に含まれる重層的なメッセージを具体的データに基づいて読みとるという、言語学と社会心理学的研究との融合分野への切り口として、今後有効なものになりうると考えられる。

（２）上記３.の（２）に示したように、語連想は語の慣用的用法を示すのみならず、当該社会において問題となっていることがらや社会・文化的環境の特徴を示すものである。そこでこの語連想パターンのあり方を、セルビアで実施された語連想テストの結果や語連想辞典のデータを用いて調べた。そこから、語連想にどのようなタイプがあり、どういった語彙がどのようなイメージや概念に結びついているかを抽出し、他者イメージ（たとえばセルビア人がロシアや旧ユーゴ地域の人々に対して抱くイメージ）を明らかにすることができた。また同時に、それらの語連想がメディア言説や映像メッセージにどのように用いられているかを調査し、両者をつきあわせることでセルビアにおける集団意識を把握することができた。この研究は北海道大学スラブ研究センター主催の国際シンポジウムで発表し、同センター刊行物に発表した。

（３）コソヴォ独立問題に対する政治的言説をセルビアの新聞、週刊誌などから選び出しし、上記３.の（１）の手法を適応して、「コソヴォ(Kosovo)」「コソヴォの(kosovski)」といった語彙の分布、刊行物全体での出現頻度と記事の主題の関係などを分析した。またコソヴォ独立問題をめぐるセルビアやロシアの政治家の発言にどのような意図が読み取れるかを、言語行為論の枠組みで分析した。この研究は北海道大学スラヴ研究センター主催のCOE総括シンポジウムにおいて口頭発表した。旧ユーゴ地域ではコソヴォ、ボスニアなど今後に多くの課題を抱えている国家があり、これらの地域でのメディア状況と言語運用の関係を継続的に追跡して行く上でも、一連の研究成果は基礎的材料を提供すると考えられる。

（４）上記３.の（３）に示したように、クロアチアで 19 世紀中期に刊行された大衆向け雑誌『ダルマチアの夜明け』の言語分析と、その編集長であったクズマニッチの活動を明らかにすることで、19 世紀当時のダルマチアの言語状況を言語事実に照合させながら考察した。『ダルマチアの夜明け』は、イタリア語が教養言語であり、南スラヴ語は農民の話し言葉でしかなかった時代に南スラヴ語（クロアチア語）を文章語として確立しようとした当時のダルマチアのクロアチア知識人たちの努力の結果であった。その言語分析と編集長であったクズマニッチの著述の分析を通して、従来しばしば言われて来たクズマニッチに対する評価、すなわりクズマニッチが中央（ザグレブ）で推進されていたクロアチア民族復興運動の潮流に反した偏狭な地方主義者であったという見方が正しくないことが明らかになった。この研究は 2010 年春の時点でまだ論文にまとめて発表するに至っていないが、クズマニッチのその他の著作の研究と合わせて、今後の継続的課題として考察していきたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計　３　件）
MITANI Keiko, “From Serbia with Love: Verbal Representation of Russia in Serbian Society”, Tetsuo Mochizuki (ed.) *Beyond the Emrpire. Images of Russia in the Eurasian Cultural Context.* Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido University, 2008.pp.353-372.査読有

MITANI Keiko, “Balkan as a Sign: Usage of the Word *Balkan* in Language and Discourse of the ex-Yugoslav People.” Hayashi Tadayuki & Fukuda Hiroshi (eds.) *Regions in Central and Eastern Europe. Past and Present.* Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido University, 2007. pp.289-313. 査読有

三谷惠子「旧ユーゴスラヴィア諸国におけるロシア語の地位-ロシア語教育の現状について―」ロシア語研究（木二会）、No.20. 2007, 1～13 頁. 査読有

〔学会発表〕（計　１　件）
三谷惠子「「Balkan とバルカン-言語学から地域研究へ」北海道大学スラブ研究センター COE 総括シンポジウム、平成 20 年 1 月 24 日、学士会館本館（東京）

〔図書〕（計　１　件）
三谷惠子「地域研究と言語学　Balkan の用法

からバルカンを探る」スラブ研究センター監修、家田修編『講座スラブ・ユーラシア学』第１巻５章、142-168 頁、講談社、2008 年、全 276 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
三谷　惠子（MITANI KEIKO）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号：10229726